

花王のアプローチ

花王の事業は、製品のライフサイクル全般において、生物の多様性が生み出すさまざまな恵みの恩恵により成り立っています。地球上の生物多様性の劣化を防ぐために私たちができることとして、その恵みを使いつくすことのない持続的な利用を進めていきます。事業活動による生物多様性への影響を低減し、生物多様性の向上につながる社会活動を推進していきます。

社会的課題と花王が提供する価値

認識している社会的課題

生物多様性に支えられた自然は、人類の社会基盤を支える豊かな恵みを提供しています。しかし、人間の社会活動により、各地域で生物多様性の劣化が課題となっています。さまざまな製品の原料となるパーム油や紙、パルプの調達においては、不適切な企業活動により、森林破壊に伴う自然破壊、生物多様性の消失といった環境面だけでなく、現地住民や農園労働者の人権侵害等の社会面でも深刻な問題が発生しています。

一方で、上述に限らず、地球上で発生している生物多様性の劣化が、私たちの消費活動と密接に関係していることが世間一般にあまり知られていないこともまた問題です。COP10で制定された、生物多様性の損失を止めるための「愛知目標」に掲げられている「生物多様性の主流化」が極めて重要であると認識しています。

花王が提供する価値

花王の事業に欠かせない主要原材料であるパーム油や紙、パルプについて、認証品の購入や原産地までのトレーサビリティ確保に関する具体的な目標を定めて、

その達成に向けて活動を推進しています。これにより、森林破壊や人権侵害のない原材料の生産が広がり、生物多様性の恵みが持続する社会の形成に貢献できると考えています。

また、社内では工場を有するグループ全拠点で生物多様性に配慮した緑地保全活動を、社外では地域社会の生物多様性保全につながる活動や生物多様性の教育に携わる学校の先生を支援する取り組み等を行なっています。これらを通じ、生物多様性の重要性について社員の意識が高まるとともに、地域の皆さまにも私たちの思いが伝わっていくことにより、「生物多様性の主流化」が進んでいくと考えています。

「2030年のありたい姿」の実現に関わるリスク

花王が原料として利用しているパーム油は同時に食料でもあります。また、紙・パルプはその形態を変え、生活のいたるところで使用されています。グローバル規模での人口増加、経済発展に伴い、世界的にパーム油や紙、パルプの需要が伸びており、持続可能性への配慮がなされないと、これら原料を将来の長きにわたり調達し続けることができなくなり、事業存続が困難になることが想定されます。

森林破壊や人権侵害のない持続可能な原材料の調達が行なわれないと、企業のレピュテーションが低下し、社会からの信頼を得られず、事業継続が困難になるリスクがあります。

「2030年のありたい姿」の実現に関わる機会

2011年に生物多様性保全の基本方針を定め、2014年に森林破壊ゼロ宣言をした花王は、生物多様性保全においてリーダーシップを発揮するとともに、持続可能なパーム油や紙、パルプの調達によって、事業継続の可能性を高めています。さらに、将来需要が高まることが予測されるパーム油の代替として、天然系でかつ非可食系の油脂源を高効率で獲得できる微細藻類に着目し、油脂生産技術開発を進め、工業的生産化をめざしています。これは、原料の安価、安定調達に資する活動です。

貢献するSDGs



方針

花王は、2010年に社内の関連部門を対象に実施した「事業活動の生物多様性に関わるリスク分析」を踏まえて、2011年に「生物多様性保全の基本方針」を策定しました。毎年レビューを行なっている基本方針では、①事業との関わりの把握、②影響の低減、③独自の技術開発、④国際的な取り決めの遵守、⑤地域生態系に配慮した事業活動、⑥社員の意識向上、⑦社外関係者との連携の計7つの方針を掲げています。



→詳細は「生物多様性保全の基本方針」と「行動指針と活動事例」

www.kao.com/jp/corporate/sustainability/environment/statement-policy/statement/biodiversity-policy.html

体制

花王では、レスポンシブル・ケア活動における環境保全の活動項目の一つとして生物多様性保全を定めています。グループ全社で中長期にわたって確実に活動を推進していくため、生物多様性に関する方針、目標、計画、活動等についてレスポンシブル・ケア推進体制で管理しています。



→P196「ガバナンス>レスポンシブル・ケア活動/体制」

教育と浸透

「生物多様性保全の基本方針」を策定した2011年から2012年にかけて、生物多様性の重要性や国際動向、花王がその保全に取り組む意義等を踏まえてこの基本方針の内容について知ってもらう目的から、日本花王グループの全社員を対象としたeラーニングを実施しました。2013年以降は、新入社員に対して生物多様性を含む環境教育を毎年実施しています。海外の社員に対しては、毎年日本で開催しているグローバルRCミーティング等を通じて生物多様性に関する情報共有や啓発等を行なっています。また、グループ全社で生物多様性に配慮した緑地保全活動を推進しており、各事業場の社員には、本活動への積極的な参画を通じて、生物多様性への理解を深めてほしいと考えています。

ステークホルダーとの協働

グローバルの各拠点において、地域の生物多様性に配慮した事業活動・社会活動を推進するため、省庁、自治体、学術機関、NGO/NPO等のさまざまなステークホルダーと連携した生物多様性保全活動を推進しています。

2008年に発足した企業団体「企業と生物多様性イニシアティブ(Japan Business Initiative for Biodiversity: JBIB)」に花王は発足当初から参加しています。近年は運営にも関わり、異業種のさまざまな企業と連携して、企業が生物多様性の保全にどのような形で貢献できるのかを検討する研究活動や「JBIBいきものDays」の開催等、多様な活動を推進しています。



→詳細は「社会貢献活動報告書」

www.kao.com/jp/corporate/sustainability/society/social-reports/

中長期目標と実績

2020年中期目標

原材料の調達などの面で、生物多様性保全に努めます。原材料調達については、主要原材料であるパーム油や紙・パルプについて、2020年目標を詳細に設定しています。

中長期目標を達成することにより期待できること

コスト低減あるいは収益拡大

持続可能な原材料の調達や拠点の緑地保全活動には少なからず付加的なコストが発生しますが、私たちの事業を持続可能なものにするために必要な社会的責任ととらえて、活動を推進しています。これらの活動により、花王に対するレピュテーションが向上し、財務面に直接的・間接的なメリットがあると想定しています。

社会に及ぼす効果

中長期目標達成に向けてのプロセスを経ることにより、原材料調達地における森林環境の保全や地域社会の人権の尊重などにつながり、将来の持続可能社会の実現に向けて前進できると期待しています。

2019年目標

生物多様性に関する目標は、以下の通りです。

1. 持続可能な原材料調達の推進

パーム油、紙・パルプを対象に、2020年までに100%持続可能な調達を行ないます。これは2020年森林破壊ゼロ宣言につながる活動です。

2. 地域の生物多様性に配慮した事業活動・社会活動の推進

2018年に実施した工場を有するグループ全拠点の生物多様性評価の結果を受けて、2019年は各拠点で活動計画・目標を立案し、推進を開始します。

3. コピー用紙削減

全社員が共通で取り組むことのできる活動として、コピー用紙の削減活動を日本花王グループから開始しています。2019年目標は、7%削減(一人当たりの印刷枚数:2017年比)です。

4. グリーン購入の推進

環境負荷ができるだけ小さいものを優先して購入する「グリーン購入」を推進しています。グリーン購入法を受けて、以前から活動を推進している日本における2019年目標は、グリーン購入率95%以上です。

2018年実績

実績

1. 持続可能な原材料調達の推進

2020年目標の達成に向けて、原産地の森林破壊ゼロの確認やトレーサビリティの確認などを推進しました。



→詳細はP139「コーポレート・カルチャー」
>持続可能で責任ある調達」

2. 地域の生物多様性に配慮した事業活動・社会活動の推進

グローバル共通の生物多様性評価基準を導入し、グローバルの全生産拠点の生物多様性評価を実施しました。

3. コピー用紙削減

一人当たりの印刷枚数は2017年比で10%削減となり、2019年目標をすでに達成しています。

4. グリーン購入の推進

日本におけるグリーン購入率は87%でした。

実績に対する考察

各拠点、各部門の生物多様性の取り組みについて進捗管理できる体制が整ってきたことは大きな成果です。

具体的な取り組み

事業と生物多様性との関わりの把握

花王は、2013年にエコロジカル・フットプリント評価を完了しました。その結果、花王の事業活動が及ぼす環境負荷は、二酸化炭素吸収地、油糧植物生育のための耕作地や牧草地、パルプや紙の生育のための森林、界面活性剤が影響を与える漁場などが大半を占めていることが確認されました*。

* BIOCITY. 2013, 56, 82.

事業が生物多様性に与える影響の低減

生物多様性に与える影響を低減するために、①事業活動に伴うCO₂排出量の削減、②原材料使用量の削減、③環境負荷の少ない原材料への切り替え等を継続的に進めています。



→詳細はP35「エコロジー>CO₂」

→詳細はP139「コーポレート・カルチャー>持続可能で責任ある調達」

生物多様性の恵みを大切に活用するための技術開発

将来需要が高まることが予測されるパーム核油の代替として、天然系でかつ非可食系の油脂源を利用する技術開発を継続しています。活性剤として未利用のバイオマスを活用することが可能となったバイオIOSや、高収率で獲得できる微細藻類を活用した油脂生産技術開発を行なっています。

国際的な取り決めの遵守

生物多様性条約、生物多様性条約締約国会議等で決定した生物多様性に関する国際的な取り決めおよび関連する各国の国内法を遵守しつつ、事業活動を進めています。

地域の生態系に配慮した事業活動

グローバル共通の生物多様性評価基準を導入

パーム油や紙・パルプ等の主要原材料の持続可能な調達の取り組みとともに、花王はグローバル各拠点における地域の生物多様性へ配慮した活動にも真摯に取り組んでいます。

日本国内には企業等による生物多様性に配慮した活動を評価する認証制度がいくつかある一方、海外では関連する認証制度がほとんどなく、グローバルで共通の評価ができていませんでした。そこで日本国内の認証制度の一つである「いきもの共生事業所®認証(通称:ABINC認証)」の評価基準にも採用されているJBIB(企業と生物多様性イニシアティブ)の「いきもの共生事業場®推進ガイドライン」で示されている考え方を参考に、花王独自の生物多様性評価基準を2017年に導入しました。

2018年には、工場を有するグループ全拠点の評価を実施し、各拠点の現状の活動レベルの把握や改善ポイントを明確化しました。評価の過程で、各拠点の優れたアイデア、取り組みも明らかとなり、グループ内で共有しました。

2019年は、本評価結果を踏まえて、各拠点で活動計画・目標を立案し、具体的に活動を推進していく予定です。

川崎工場 第三者認証(「いきもの共生事業所®認証(通称:ABINC認証)」)を取得

川崎臨海工業地帯の一角に位置する川崎工場は、アタック、ハミング等の花王の主力商品を首都圏に供給している工場です。このエリアでは町や企業の緑地が極めて少なくなっています。

川崎工場は、2000年に近隣地を購入して新たな工場を建設した際、掘削した残土を盛上げ、場内に点在していた樹木をここに移植する等により約7千㎡のまとまりのある緑地を造成しました。以後、手を入れることなく自然の状態を15年以上にわたり維持してきた結果、高低差のある多様な樹木、草木が混在する“自然の森”に成長しました。ここに遊歩道を作ったことで、工業地帯とは思えない静けさを有するこの森は社員の憩いの場となりました。

その後、地域の生物多様性への配慮という観点から、森を間伐してところどころ日の光が差し込むようにし、間伐材をエコスタック(生物の棲み家)や椅子などへ再利用しました。野鳥が好む花や実のなる樹木や草木を植え、野鳥の巣箱や、石積みなどの生物の隠れ家となる隙間のある構造物等を設置しました。

さらに、環境調査等を専門とする会社に生物モニタリングを依頼し、植物176種、鳥類11種、昆虫類56種の生息を確認することができました。とりわけ、都市部では珍しいジャコウアゲハの生息とその幼虫の食草となるウマノスズクサの群生が工場内で確認されたことには、関係者一同大変驚きました。現在、社員が中心となり、繁殖地としてこれらの生物の保護に力を注いで

います。

これらの地道で総合的な活動が評価され、川崎工場は、2018年、一般社団法人 いきもの共生事業推進協議会(ABINC)の「いきもの共生事業所®認証」を取得しました。



川崎工場と緑地

川崎工場に生息する昆虫、鳥類、植物



ジャコウアゲハ(成虫)



ジャコウアゲハ(幼虫)と食草のウマノスズクサ



オンプバッタ



シオカラトンボ



シジュウカラ



ヒヨドリ



ヘクソカズラ



ヤマモモ

和歌山工場 「企業の森」事業に参画

和歌山県が主催する「企業の森」事業に、和歌山工場は2007年より参画し、工場が利用している紀ノ川の水源地である紀美野町の山林を活動地として、毎年多くの社員とその家族が地元種の植樹や下草刈り等を継続して行なってきました。10年間の活動により健全な山林に育ってきたことから、2017年より活動地「花王の森おいし」を追加しました。

2018年は新たな取り組みとして、地域の遺伝子を守る目的から、活動地周辺で採取したウリハダカエデ、カヤ等の苗木を社員が自宅で育て、これを活動地に持ち寄り、2018年11月に総勢100人を超える参加者による植樹を行ないました。



「花王の森おいし」で植樹活動に参加した社員と関係者の皆さま

鹿島工場 「低炭素杯2018」で表彰

低炭素杯は、全国の学生・市民・企業・自治体などが低炭素社会に向けた取り組みをプレゼンするコンテストです。2018年は1,167団体が応募し、30団体がファイナリストとして出場しました。

鹿島工場は、茨城県内の市民や企業が取り組む地球温暖化防止活動を発表するクールアースいばらき2017大会で「最優秀賞」を受賞したことから、低炭素杯2018に茨城県代表として出場しました。1980年の工場建設当時から継続している、「50年後を考慮して計画された緑地づくり活動」を紹介し、植林によるCO₂削減効果のほか、生物多様性に富んだ森を砂地の上に復活させた地道な活動が高く評価を受け、表彰されました。



低炭素杯2018

社員の意識向上・情報共有

川崎工場・鹿島工場 JBIB「いきものDays」への参加

「いきものDays」は、愛知目標の一つに掲げられている「生物多様性の主流化」をめざして、JBIBに参加する企業の自社緑地や関連する緑地において、動植物のモニタリングや植林活動を実施するJBIB主催のイベントです。花王は運営、活動の双方に関わっており、イベントには川崎工場、鹿島工場が参加しました。

川崎工場は、5月にイベントを開催し、新入社員を中心に、工場長、環境保全に関わるメンバー等、計41人が参加。当日は生物調査の専門家をお招きし、生物多様性の重要性や、企業が生物多様性保全に取り組む意義等について講義を受けた後、生物調査を実施しました。ニホンヤモリなど、身近な緑地に棲む生物を体感でき、時折大きな歓声が上がっていました。イベントを通じて生物多様性について皆で考える大変有意義な1日となりました。



専門家の説明を受ける川崎工場の社員

花王(台湾) 工場周辺の植樹活動と地元NGOによる苗木配布イベントへの参加

工場の立地する新竹県の政府所有の裸地において、花王(台湾)から51人が参加して、専門家の協力により台湾に自生する樹木(苗木)100株の植樹を行ないました。今後3年をかけて計300本以上の植樹を行なう予定です。また、植樹と同じ日に、近隣の新竹高鐵駅で、台湾に自生する草木の苗1,000株を旅行者に配布する地元NGOのプログラムに花王(台湾)から51人が参加しました。

これらの活動は38のメディアによる計52の報道で取り上げられ、台湾において大きな話題となりました。その後も上記の植樹地において、地元の廃棄物を活用したコンポスト作り等、生物多様性に配慮したさまざまな活動を推進しています。



植樹活動



→花王(台湾)の生物多様性保全活動動画
www.youtube.com/watch?v=Hnj7YAvWY2M
www.youtube.com/watch?v=ZdgHVRBSrBQ&feature=youtu.be

花王コーポレーション(スペイン)(KCSA)

生物多様性について学ぶ資料を制作

2018年、KCSAでは自社の生物多様性の評価結果を踏まえて、自社の3工場における生物多様性について学ぶ資料を制作しました。工場見学者への説明や社員の啓発などに有効に活用しています。

制作した資料

- ・工場の生態系ネットワーク、外来生物、水循環などのテーマごとに詳細に解説した小冊子
- ・工場の生物多様性視点での見どころを紹介したパンフレット
- ・工場に生息している野鳥や昆虫などの生き物を写真入りで紹介するポスター



「東日本グリーン復興モニタリングプロジェクト」を社員ボランティアがサポート

2018年は、10人の社員が現地に赴き、調査のサポートをしました。この調査で得られたデータは、生物多様性に配慮した復興の計画や、種の保全のために活用されます。

社外の関係者との連携

花王・みんなの森づくり活動

2018年3月に、2018年助成先として「森づくり活動」分野で7団体、「環境教育活動」分野で8団体、合計15団体の助成を決定しました。これまでにのべ462団体を支援しており、活動に参加した市民の方は41万人に上ります。

タイ北部“FURUSATO”環境保全プロジェクト

2012年からの5年間で、目標としていた35haに42,500本の植林を達成しました。タイ北部の森林再生に寄与すると同時に、形成された森林をどのように活かし共存していくかといった、住民主体の持続可能な森づくりへの意識も高まりつつあります。

第1フェーズのプログラムは終了し、第2フェーズとして、2019年4月から3年間の計画で、地域住民の雇用創出や技術習得につながる森づくりのフォローアップを行ないます。

「花王・教員フェロースhip」で教員を野外調査プロジェクトに派遣

2018年は、5プロジェクトに10人の教員が参加し、現地で得られた経験を学校や地域での環境教育に活用いただいています。11月には、本年およびこれまでの参加者が参加する活動報告会を実施し、環境教育の実践事例の情報交換を行ないました。これまでのべ80のプロジェクトへ158名の教員の皆さまに参加いただいています。